

【神無月】かみなづき

・神無月空の果てよりきたるとき眼ひらく花はあはれなるかも『赤光』斎藤茂吉

写生を旨とするアララギ派の茂吉にしては、白秋にも似たちよっぴり甘口の歌といえましょう。十月の異名神無月のご承知の通り[カンナヅキ]、あるいは[カミナヅキ]と読むのが通例です。「カンナヅキ」から時代を経て徐々に「カミナヅキ」に訓が推移したと聞いたことがあります、真偽のほどはわかりません。

どちらで読もうとも散文であればさしたる問題はないでしょうが、韻文は調べが命ですので、茂吉の「神無月」をいかに読むべきか、茂吉はどう読んだのか、大いに興味のあるところです。この問題は意外にも簡単に解決しました。茂吉自身が改選本でわざわざ「かみなづき」とルビをふっていたのです。

茂吉の第一歌集であり最も評価の高い『赤光』所収の歌は、初出誌『アララギ』・初版『赤光』初版大正2年刊・改選本『赤光』大正10年刊に載っています。

私は茂吉ファンを自称しながら迂闊にも改選本に目を通していませんでした。ルビの存在はある文芸誌で知った次第です。

確かに「ン」より「ミ」の実体感のある音の方がこの歌の初句の調べにはふさわしいでしょう。初版から八年を経た改選本でわざわざルビをふったのは、おそらく初出以降、茂吉が「カンナヅキ空ノ果テヨリ…」と読む多くの読者を苦々しく思っていたのことでしょう。

ルビにより茂吉の思いは伝えられましたが、ルビは字面を重くし、説明的なくどさを覚えます。これは、活字本に装丁することが常となった現代短歌の課題といえるのではないのでしょうか。やはり、歌の原点は活字を用いて眼から味わうものではなく、耳から味わうべきなのでしょう。これも中国は文字の国、日本は言葉の国といわれる所以なのでしょう。

十月はなぜ神無月といわれるのでしょうか。

「それは全国の神様が十月に出雲大社に集まり、……」と多くの人は答えることでしょう。この「出雲結集留守説」は既に中世には存在していたらしく、近代では『古事類苑』にも他説と共に紹介されています。話として面白く、巷では定説のごとく流布しているようです。

しかし、この説はあくまで俗説で、語源とは関係ありません。

なぜなら神無月という言葉が既に見られる万葉の時代、日本の神々は仏教のような世界宗教ではなく、各地土着の民俗神ですので全国的ネットワークの形成などありえず、一同に会する必要もないのです。

日本古来の神を代表する祖先神は里から山へ・山から里へ移座するものであり、神が遷る山も里人が見上げることのできる範囲の山に限られ、神は山から里へ川の水を供給し田畑を潤すのです。

「出雲結集留守説」が生まれたのは神無月の「無」の字に原因があるのでしょうか。

「無」は「な」の音に漢字を当てただけで、意味を求めるべきではありません。

上代の「な」は口語の助詞「の」の意味に当たります。

つまり「神な月」は「神の月」という意味になります。もっと具体的にいえばお祭りの月ということになるのでしょう。

昔は陰暦九月に祭の準備を始め、十月に収穫祭を行いました。祭りを終えて冬を迎える準備に入ったのです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~